■高芙蓉　　儒学者，篆刻家，画家。日本における篆刻を確立して"印聖"と讃えられる。
こうふよう

・・・・・・1722＝　現在の甲斐市竜王で，長田徳本流の医師大嶋尤軒の子に生れる。生地は，甲斐高梨郡とされるも存在せず，甲府市域の高成か高町とする説，あるいは甲斐市(旧中巨摩郡竜王町)域の名取が有力である。上野国新田氏を祖とするが，徳川光圀に土蔵番として仕えた祖父庄左衛門義之が，勤務中に，盗難事件に巻き込まれ職を免ぜられてこの地に移住してきた。**_苗字の高は出身地の甲斐国高梨郡に因んで自ら名乗ったもので，富士山に近い地であったことから，富士を愛し，芙蓉と名乗ることになる。**

生まれつき賢明で，長ずるにつれ，学問を好み，芸術の才を発揮，

・・・・・・1731＝ 9歳：
享保大飢饉・1732＝10歳：

書画篆隷が好きであったが，一旦は父を継ぐべく医業の道に進み，
・・・・・・1740＝18歳：
・・・・・・1741＝19歳：この頃，幕医武田長春院の塾に通うも，結局は，文雅の道を志して京都に遊歴，
京都では丸太町油小路に住み，衣棚下立売や，売講，個人教授，弓や馬術など教えて生計を立てる間，ほぼ同い年で，ともに山登りを愛する画家池大雅，書家韓天寿を識って，生涯の友になるとともに，坊城菅公に従い有職故実を習らい，この方面に詳しい藤貞幹や伊勢の中川経雅らと親しく交際。多芸博学にして風雅を好み，書画を能くし，特に煎茶道にも造詣が深く，"キビシヤウ"(急焼)を案出したとされる。銅器や玉材，銭貨といった器物の鑑賞家である一方，学問にも励み，独学で中国古典を読破。経学・漢学など幅広く吸収，経書を研究するにあたり，もっぱら古註を用いるうち，**_篆刻に強い関心を抱くようになり，真蹟，法帖，碑帖などを蒐集し，先人の書について研鑽を積む間，趙孟?や文徴明の法帖を模刻するなどして，その才能が開花，限られた古銅印から韻致をくみ取って，高雅な刻風を創出し，芸術の域にまで高めたことによって，"印聖"と讃えられるレベルにまで達する。**
・・・・・・1749＝27歳：池大雅と越中立山・加賀白山に登る。
徳川吉宗没・1751＝29歳：加賀藩前田家に嗣子付き儒官として仕え，
致仕後は，京都に住んで門生の指導にあたり，柴野栗山，柳沢淇園，木村兼葭堂，売茶翁，大典顕常，永田観鶩など多くの文人墨客と交流，**_木村兼葭堂が入手した明代の篆刻家蘇宣の「蘇氏印略」4巻を範として模刻したり，同じく明の甘暘の「印正」に注解して刊行した。こうして中国歴代の印譜や文献を渉猟して秦・漢にまで遡り淵源を窮め，諸流派を探求しついに日本における印章制度を確立，知友の皆川淇園や柴野栗山らは芙蓉を印章学の大成者と見做して"印聖"と讃えている。**
山脇東洋解剖1754＝32歳：80歳の売茶翁に印三顆を贈っている。
日本の印章制度は古く，中国に習った「大宝令」によって確立され，様々な場面に対応するものがつくられたが，律令制度が崩れた中世には朝廷や寺院を除いて衰退，私印全盛となり，江戸時代に入って，古書画の落款印章が重視されるようになった。明王朝滅亡で亡命してきた黄檗禅僧によって篆刻がもたらされ，その後，長崎に渡来した独立性易，東皐心越を祖に形成され，文人学者の教養になっている時代であった。
宝暦事件・・1758＝36歳：佚山「小篆千文異同攷」，趙子昂「雪賦」に跋を記す。**_鑑識にも詳しく，**
大弐政治批判1759＝37歳：「上野多胡郡碑文」を篆刻。**_「？？(くさかんむりに函，同じく刀と臼)居印譜」，**
大岡忠光没・1760＝38歳：**_張彦遠撰「古今公私印記」を篆刻。終生の友池大雅・韓天寿と京を発ち，白山・立山・戸隠山・浅間山に，そして，江戸より富士山に登り，帰洛。この旅を記念して三人それぞれが「三嶽道者」を号したという。富士山を筆写した「百芙蓉図」は有名である。**
・・・・・・1761＝39歳：肥前蓮池藩鍋島摂津守に仕官した。
・・・・・・1762＝40歳：この頃，"近藤齋宮"と改姓する。
・・・・・・1763＝41歳：「趙子昂詩帖」を篆刻。
蘭銭初輸入・1765＝43歳：芙蓉刻で，「文徴明茶歌帖」刊行。
忠臣蔵大当り1766＝44歳：安子深編「安氏占銅印彙」に跋す。
明和事件・・1767＝45歳：この年誕生し，のちに野々村仁清、尾形乾山と共に，日本三大陶工の一人となる青木木米には，早くから書を教え，没するまで可愛がった。祇園の芙蓉宅付近に住んでいた木米は芙蓉の居宅に遊ぶうちに，書画や篆刻などを学んだようである。
御蔭参流行・1771＝49歳：五十の賀宴。
田沼意次老中1772＝50歳：
大原騒動・・1773＝51歳：池大雅の「桃源図」に賛す。
解体新書・・1774＝52歳：「元明清書画人名録」二冊の出版を出願。
雨月物語刊・1776＝54歳：
・・・・・・1777＝55歳：「牢物最上帖」に跋す。
ﾛｼｱ船蝦夷来 1778＝56歳：「子昂憎蒼蠅賦帖」を篆刻。**_東漸を示す注目すべき書，依嘱者植田華亭編で「采真堂印譜」を刻した。**
蘭学階梯・・1783＝61歳：水戸の支藩宍戸侯松平大炊頭に招聘され，別れを告げるため浪華に下る。
意知刺殺事件1784＝62歳：永田観鵝の「観鵝印影」を製し，東山一心院に寿蔵を建立後，**_祖父が仕えた水戸藩の分封常陸宍戸藩の松平頼救の招聘に，縁を感じて，一家あげて江戸に赴いたが，道中病を得，江戸目白台の藩邸に到着まもなく，没した。まさに，日本最古の印章とされる"漢委奴國王"が発見された年であった。**
翌年，源惟良によって，芙蓉の代表的な印譜「芙蓉軒私印譜」(柴野栗山序)が編せられ，高芙蓉の印七十二顆が門人により，東山一心院の寿蔵下に埋められるとともに，円山応挙によって高芙蓉の肖像画が描かれた。
"芙蓉の影子"といわれた曽子唯を筆頭に多くの門人を輩出，今日まで，伝えられることになった。

Wikipedia「高芙蓉」，神野雄二「高芙蓉の篆刻」，